

第1章 媒体別の外来語の特徴

田中 牧郎

1 はじめに

「外来語」言い換え提案は、公共性の高い媒体における外来語を問題としている。この提案では、そうした媒体における外来語の使用実態を、さまざまな調査によって把握しつつ、問題を整理し、提案に結び付けていった。本論文は、その調査結果のうち、2003年発行分の媒体についてのデータの一部を報告するものである。

「外来語」言い換え提案で公共性の高い媒体と位置付けるのは、省庁が発行する白書、地方自治体が発行する広報紙、報道機関による新聞の三つである。いずれも、公共性の高さという点では共通の性質を持っていると考えられる。田中（2006）では、これら三つの媒体の外来語の比率は、延べ語数で2～4%であり、雑誌など他の媒体に比べて総じて低いことを述べた¹。一方、三つの媒体はそれぞれに独自の性質を持っており、そこに使われる外来語にも独自性があるのではないかと考えられる。本論文では、この点を問題にする。

以下、三つの媒体の電子化された本文を対象に、コンピューターを用いて行った頻度調査のデータもとに、各媒体を特徴付ける外来語について、考察したい。

なお、本論文で提示する、ある外来語が各媒体にどの程度使われているかを示す「出現率」と、どの程度偏って使われているかを示す「特化係数」とは、報告書の第1部『「外来語」言い換え提案で取り上げた外来語』の、【調査データ】に、「公共媒体における使用状況」として、活用している。

2 調査対象の資料

電子化資料によって調査を行おうとする際、まず、すでに電子化されているものが入手できるかどうか問題になる。

新聞や白書は、電子化本文が提供されているものが大量にあるので、これを活用することが考えられる。ただし、それらは言語研究を目的として作られているわけではないので、調査に先立っていくつかの処理を施す必要がある。例えば、白書の電子化本文は、書籍版の付録CD-ROMや省庁のホームページで提供されているが、その本文の範囲や形式は、出版社や担当する省庁によって異なっている。これらを一律の資料として扱うには、本文を均質化する処理が必要である。そこで、それら電子化本文と書籍媒体の本文とを照合して、調査対象とする電子化本文の範囲を確定させ、形式を統一した。また、新聞の電子化本文は、CD-ROM版として販売されているものと、新聞社のインターネット検索サービスとして提供されているものとがあるが、本文の全体が見わたせ、一括処理ができるという点では、CD-ROM版の方が使いやすい。CD-ROM版に添付されているデータ仕様を参照しつつ調査対象とする電子化本文の範囲を定めた。

一方、広報紙は、白書や新聞のように電子化本文の入手が容易ではない。自治体のホームページで広報紙を提供するところが多いが、その多くは紙面のイメージをそのまま提供するものであり、電子化本文として自在な検索や抽出を行える形にはなっていない。白書や新聞の場合と同等の電子化本文に整備するまでの前処理に、格段に大きな手間がかかる。

このような、各媒体の電子化本文の状況を勘案しつつ、「外来語」言い換え提案に必要な資料を、できるだけ効率的に扱えるようにすることを考えて、以下に示すような資料を、具体的な調査対象に定めた。これらの基礎資料は、2003年発行分から毎年同じ作業原則を立て継続的な調査対象としたが、白書や広報紙は年によってその内訳が異なっている。ここには、本論文が扱う2003年発行分を例に示す²。

(1) 白書

2003年発行の白書。「白書」と名の付く出版物は多いが、省庁などから国会や閣議に報告された内容に基づくものが、公的な性格を最も強く持っていると考えられる。この条件にかなうもののうち、電子化本文が入手できるものを対象とする。具体的には、次の36冊である。括弧内は、編集・発行を担当する省庁などである。

外交青書（外務省）、政府開発援助白書（外務省）、環境白書（環境省）、循環型社会白書（環境省）、通商白書（経済産業省）、製造基盤白書（経済産業省・厚生労働省・文部科学省）、警察白書（警察庁）、原子力安全白書（原子力安全委員会）、原子力白書（原子力委員会）、公害紛争処理白書（公害等調整委員会）、独占禁止白書（公正取引委員会）、厚生労働白書（厚生労働省）、労働経済白書（厚生労働省）、観光白書（国土交通省）、国土交通白書（国土交通省）、首都圏白書（国土交通省）、土地白書（国土交通省）、消防白書（消防庁）、公益法人白書（総務省）、情報通信白書（総務省）、中小企業白書（中小企業庁）、交通安全白書（内閣府）、防災白書（内閣府）、高齢社会白書（内閣府）、国民生活白書（内閣府）、障害者白書（内閣府）、青少年白書（内閣府）、男女共同参画白書（内閣府）、経済財政白書（内閣府）、食料・農業・農村白書（農林水産省）、森林・林業白書（農林水産省）、水産白書（農林水産省）、文部科学白書（文部科学省）、犯罪白書（法務省）、人権教育・啓発白書（法務省・文部科学省）、防衛白書（防衛庁）

(2) 広報紙

2003年発行の自治体広報紙。入手と本文整形に手間がかかるため、次のような方法で対象を限定した。白書や新聞に比べて、少量にとどまる。

- ①全国の市区町村リストから無作為に一つの自治体を抽出する。
- ②その自治体の発行する広報紙がインターネットでダウンロードできる形で公開されているかどうか確認する。
- ③インターネットでダウンロードできる2003年発行分の広報紙が確認できれば、無作為に1号を抽出し、その全文を電子化本文として整形する。

この手順で、61の自治体を選び、その広報紙を1冊（1号）ずつ、計61冊を対象とした。具体的には、次の自治体である。

北海道千歳市、岩手県釜石市、岩手県平泉町、秋田県大館市、秋田県天王町、山形県飯豊町、山形県村山市、宮城県七ヶ浜町、福島県月舘町、福島県東和町、茨城県内原町、群馬県赤堀町、埼玉県坂戸市、埼玉県飯能市、埼玉県妻沼町、埼玉県吉田町、埼玉県和光市、千葉県四街道市、千葉県松戸市、千葉県千葉市中央区、東京都特別区部港区、東京都立川市、神奈川県山北町、神奈川県厚木市、神奈川県川崎市高津区、山梨県大月市、山梨県昭和町、新潟県中条町、新潟県六日町、新潟県長岡市、長野県伊那市、三重県安濃町、三重県津市、福井県織田町、岐阜県上矢作町、岐阜県平田町、岐阜県古川町、岐阜県兼山町、京都府長岡京市、京都府木津町、奈良県王寺町、大阪府大阪市東淀川区、大阪府堺市、大阪府豊中市、兵庫県吉川町、兵庫県神戸市北区、兵庫県関宮町、岡山県灘崎町、岡山県西栗倉村、岡山県勝山町、岡山県船穂町、岡山県山手村、広島県広島市安芸区、広島県三原市、山口県小野田市、愛媛県土居町、福岡県福岡市博多区、福岡県北九州市八幡東区、長崎県琴海町、長崎県長崎市、宮城県北郷町

(3) 新聞

「CD-毎日新聞³」に収録される、2003年発行「毎日新聞」の朝夕刊すべての記事。

以上のようにして調査対象に定めた、各媒体の2003年発行分の資料の総文字数は、次の通りである。

白書	7,003,448 字	新聞	52,156,602 字
広報紙	1,221,318 字		

総文字数の差は非常に大きく、このことが、統計的な分析の支障になる場合のあることが予想される。例えば、語の使用頻度を比較しようとする場合、度数そのものを指標にできないことなどである。この支障を解消する方策として、新聞や白書のデータ量を、広報紙と同程度にまで減らすことも考えられるが、そのことによって、例えば、低頻度の外来語のデータ量が全体的に大きく目減りしてしまうなど、別の問題も生じてくる。そこで、本論文では、データ量の違いをある程度捨象して語の使用頻度を比較できる統計処理を導入することで、支障の解消をはかることとし、上記の資料全体を対象とすることにしたい。

3 調査方法

3.1 外来語の抽出

2に述べた電子化資料から、正規表現を用いて、カタカナが2文字以上連続する文字列をすべて抽出する方法で、カタカナ語を抽出した。カタカナ1文字だけの語は、記号としての用法であったり（ア、イ、ウ、…、のような序列を表すもの）、和語であったり（感動詞「エ」や、終助詞「ネ」など）する 경우가多く、外来語である場合が少ないので、対象外とした。また、「ー」（長音記号）、「・」（ナカグロ）を含む文字列は連続するものと扱った。

文字列抽出は前後文脈付きで行い、得られたデータを対象に、適宜文脈を参照しつつ、単位処理、同語異語判別、非外来語の除外、の三つの修正作業を人手によって行った。その要点を記すと次の通りである。

（1）単位処理

- 一語としてつながっているか、切れているか、判断の難しいものもあるが、原則としてつながっているものと扱った。こうした扱いによって、外来語の接続した複合語や連語をかなりゆるく一語に認める立場に立つことになる。

例) リーグトップの成績 「リーグトップ」で一語と認める。

例) アイ・ラブ・ニューヨーク 「アイ・ラブ・ニューヨーク」で一語と認める。

- 語の切り出しが、語構成上、明らかに不適切となるものは、修正した。

例) ロシア・サッカー代表チーム

カタカナ文字の連続を抽出する方法によると、上記の文字列からは、「ロシア・サッカー」が一つの単位として切り出される。しかし、「ロシア・サッカー」という単語を一語として切り出すことは不適切であり、まずは「ロシア」と「サッカー代表チーム」に分けるべきである（さらに、「サッカー」「代表」「チーム」の3つに分ける）。このような場合、「ロシア・サッカー」と抽出されたものを、「ロシア」と「サッカー」との二つの単位に分割した。

- ナカグロの有無、長音記号の有無でゆれるものは、同語にまとめた。

例) ア・ラ・カルト アラカルト 同語にまとめ「アラカルト」で代表させる。

例) コンピューター コンピュータ 同語にまとめ「コンピューター」で代表させる。

- カタカナ表記のゆれと認められるものは、同語にまとめた。

例) ウイスキー ウィスキー 同語にまとめ「ウイスキー」で代表させる。

例) メール メール 同語にまとめ「メール」で代表させる。

（2）同語異語判別

- 多義語・同音異義語は、原則として意味の区別をせず、同語にまとめた。これらを区別するためには、文脈の分析を丁寧に行うことが必要になるが、今回の調査では、それを全体に及ぼす余裕がなかった。

例) ケース（箱） ケース（場合） 「ケース」という一語にまとめる。

例) バス（乗り物） バス（風呂） 「バス」という一語にまとめる。

(3) 非外来語の除外

○ 漢語や和語がカタカナで表記されたものは除外した。

例) ケータイ

例) トヨタ

例) メス (雌)

「メス」のように、外来語と漢語・和語とが、ともにカタカナで書かれるもの（「メス」の場合は、mesと雌）は、文脈を分析し、漢語や和語は除外し外来語のもののみを対象にした。

3.2 特化係数の算出

三つの媒体における外来語のなかには、どの媒体にも同じ程度使われるものもある一方で、特定の媒体に偏って使われるものもある。語ごとに、媒体への偏りの度合いを測ることによって、各媒体における外来語の特徴が明らかにできると考えられる。

個々の外来語の各媒体への偏りを測る指標として、「特化係数」を用いる。これは、その媒体への出現頻度が、全媒体の出現頻度の平均に比べて、どの程度特異であるかを測るものである。この場合、媒体間で頻度を比較する必要があるが、上述したように、今回の調査対象の資料では、媒体間のデータ規模の違いが相当に大きい。そのため、まずは媒体間のデータ規模の違いを捨象しなければならない。そこで、次のような「出現率」を算出して、比較のできる頻度とする。

$$\text{出現率} = \text{出現度数} \div \text{総文字数} \times 10^6$$

例えば、「アイデア」という外来語は、今回調査対象とした白書に22回、広報紙に16回、新聞に201回現れているが、その出現率は、下のように算出する。「出現度数」とは、各媒体において「アイデア」が現れた回数、「総文字数」とは、調査対象にした各媒体の全体の文字数である。 10^6 を掛けることで100万字あたりに何回その語が出現するかを測ることができる。

$$\text{白書の出現率} : 22 (\text{出現度数}) \div 7,003,448 (\text{総文字数}) \times 10^6 = 3.14$$

$$\text{広報紙の出現率} : 16 (\text{出現度数}) \div 1,221,318 (\text{総文字数}) \times 10^6 = 13.10$$

$$\text{新聞の出現率} : 201 (\text{出現度数}) \div 52,156,602 (\text{総文字数}) \times 10^6 = 3.85$$

「特化係数」は次の計算式で求める。

$$\text{特化係数} = \text{ある媒体の出現率} \div \text{三つの媒体の出現率平均}$$

「アイデア」の三つの媒体の出現率の平均を求めると、6.70となる。その平均値を1とした場合、各媒体の出現率がいくらになるのかを計算し、その値を特化係数とした。

$$\text{白書の特化係数} : 3.14 (\text{白書の出現率}) \div 6.70 (\text{出現率平均}) = 0.469$$

$$\text{広報紙の特化係数} : 13.10 (\text{広報紙の出現率}) \div 6.70 (\text{出現率平均}) = 1.956$$

$$\text{新聞の特化係数} : 3.85 (\text{新聞の出現率}) \div 6.70 (\text{出現率平均}) = 0.575$$

この計算結果から、「アイデア」は、広報紙の特化係数が高く、新聞と白書の特化係数が低いことが読み取れ、白書や新聞よりも広報紙でよく使われている語、すなわち広報紙に偏在する語であるということが分かる。

この手順ですべての外来語について各媒体の特化係数を算出した。各媒体で特化係数が高くなる語は、それぞれの媒体でよく使われ、他の媒体ではあまり使われない偏在度の高い語であると見ることができよう。

4 偏在語彙の意味分野

まず、各媒体において特化係数の高い外来語、すなわち、その媒体に偏在する外来語がどのようなものであるかを見てみたい。その際、ある程度頻度の高い外来語に限るために、三つの媒体の出現度数の合計が200以上のもののみを対象とする。各媒体で特化係数の高い上位の語50語を示し、その特徴を意味分野の観点から考察したい。特化係数の値が同じ場合は、総度数の高いものを上位と扱った。固有名詞は除外したが、固有名詞の一部が切り出されて、切り出された単位では普通名詞となるもの（「日本ハム」の「ハム」など）は、除外していない。

4.1 白書に偏在する語彙

表1 白書の特化係数 上位50語

順位	外来語	総度数	白書度数	白書出現率	白書特化係数
1	パートタイム	331	321	45.835	2.988
2	モニタリング	200	192	27.415	2.983
3	イニシアチブ	225	187	26.701	2.920
4	コンテンツ	304	262	37.410	2.877
5	ユーザー	290	200	28.557	2.829
6	グローバル	348	229	32.698	2.804
7	ガイドライン	406	256	36.553	2.781
8	メカニズム	246	142	20.276	2.731
9	データベース	379	236	33.698	2.715
10	シェア	472	264	37.696	2.713
11	ライフスタイル	216	140	19.990	2.696
12	インフラ	438	300	42.836	2.640
13	セキュリティ	365	222	31.699	2.639
14	キャリア	211	104	14.850	2.636
15	バイオマス	211	185	26.416	2.632
16	フリーター	326	163	23.274	2.567
17	チャリティ	262	218	31.128	2.540
18	サイクル	250	124	17.706	2.539
19	リスク	1053	536	76.534	2.539
20	ヘリコプター	339	177	25.273	2.529
21	システム	4354	2475	353.397	2.511
22	ニーズ	911	694	99.094	2.476
23	プロセス	480	214	30.556	2.461
24	プロジェクト	1010	633	90.384	2.456
25	デフレ	1024	397	56.686	2.365
26	アクセス	513	266	37.981	2.358
27	ハイテク	275	88	12.565	2.334
28	ネットワーク	1549	1009	144.072	2.329
29	ノウハウ	347	142	20.276	2.286
30	ベース	507	197	28.129	2.264
31	ロボット	306	101	14.421	2.259
32	グリーン	200	91	12.994	2.230
33	モデル	972	453	64.682	2.220
34	バブル	668	195	27.843	2.215
35	メリット	384	171	24.417	2.200
36	コラム	760	281	40.123	2.192

37	サミット	341	143	20.419	2.171
38	コスト	1362	645	92.097	2.155
39	バリアフリー	502	361	51.546	2.153
40	ミサイル	1235	313	44.692	2.150
41	メーカー	1525	418	59.685	2.149
42	ピーク	559	211	30.128	2.132
43	ブロードバンド	244	161	22.989	2.117
44	レベル	1274	485	69.252	2.086
45	データ	1696	585	83.530	2.074
46	シナリオ	226	50	7.139	2.037
48	プログラム	931	436	62.255	2.001
47	タンク	588	118	16.849	1.955
48	ベンチャー	221	97	13.850	1.904
49	エネルギー	1631	635	90.670	1.877
50	ダム	572	146	20.847	1.850

表1は、白書の特化係数の上位50語を一覧にしたものである。この50語を意味分野によって分類すると、次の通りである。

＜経済・産業＞ 1. パートタイム, 5. ユーザー, 6. グローバル, 10. シェア, 12. インフラ, 14. キャリア, 16. フリーター, 17. チャリティー, 24. プロジェクト, 25. デフレ, 31. ロボット, 34. バブル, 38. コスト, 41. メーカー, 48. ベンチャー, 49. エネルギー, 50. ダム

＜情報＞ 4. コンテンツ, 9. データベース, 15. バイオマス, *26. アクセス, 27. ハイテク, 28. ネットワーク, 43. ブロードバンド, 45. データ

＜保安・防災＞ 2. モニタリング, 13. セキュリティ, 20. ヘリコプター, 40. ミサイル, *47. タンク

＜福祉＞ 11. ライフスタイル, 39. バリアフリー

＜外交＞ 3. イニシアチブ, 7. ガイドライン, 37. サミット

＜環境＞ *2. モニタリング, 15. バイオマス

＜抽象物＞ 8. メカニズム, 18. サイクル, 19. リスク, 21. システム, 22. ニーズ, 23. プロセス, 29. ノウハウ, 30. ベース, 32. グリーン, 33. モデル, 35. メリット, 42. ピーク, 44. レベル, 46. シナリオ

＜その他＞ 36. コラム

語の意味分野の分類枠には、様々なものが考えられるが、ここでは、この50語の性質を見えやすくするのに有効な見方として、上記の枠組を設定した。

*を付した語は、語義によっては、上で分類した分野とは別の分野にも属すると考えられるものである。例えば、「26. アクセス」は、情報などへの接続を意味する場合は、＜情報＞だが、交通手段の意味で用いられることもあり、その場合は＜経済・産業＞の分野に入れるべきであろう。また、「47. タンク」は、＜保安・防災＞のほか、＜環境＞と見ることもできよう。さらに、「2. モニタリング」は、＜環境＞だけでなく、＜経済・産業＞にも分類できる。

なお、「35. コラム」は、いずれの分類にも入りにくいので、＜その他＞としたが、「コラム」の例の大部分は、白書に多い「コラム」記事の表題などになっているもので、記事本文の例は少ない。

白書に偏在する語彙として、＜経済・産業＞＜情報＞の分野に属するものが多いことは、国の政策の重点がこれらの分野に置かれていることをものがたるものではないかと考えられる。＜保安・防災＞、そして＜福祉＞＜外交＞＜環境＞の分野に属する語も多く、これらも政策上の重要な分野であると考えられる。また、＜抽象物＞に属する語も相当に多いことも、注目される。様々な語が＜抽象物＞に分類されるが、特に社会やその構成物の動きや性質などを意味する語が多い。

4.2 広報紙に偏在する語彙

表2 広報紙の特化係数 上位50語

順位	外来語	総度数	広報紙度数	広報紙出現率	広報紙特化係数
1	コーナー	559	174	142.469	2.790
2	チャレンジ	202	92	75.328	2.768
3	プール	422	115	94.161	2.739
4	ページ	658	119	97.436	2.654
5	ホール	957	146	119.543	2.635
6	ギャラリー	237	31	25.382	2.596
7	コース	1083	190	155.570	2.542
8	チケット	341	54	44.215	2.542
9	センター	5101	1247	1021.028	2.482
10	ポスター	296	53	43.396	2.480
11	グラウンド	274	29	23.745	2.462
12	サイズ	220	24	19.651	2.454
13	プレゼント	450	44	36.027	2.453
14	クラブ	1191	178	145.744	2.432
15	バレーボール	309	27	22.107	2.410
16	サポート	239	34	27.839	2.379
17	パネル	229	43	35.208	2.356
18	リズム	331	29	23.745	2.353
19	ペットボトル	216	33	27.020	2.317
20	ファクス	668	49	40.121	2.315
21	チャンネル	224	32	26.201	2.306
22	コンサート	440	36	29.476	2.299
23	バスケットボール	296	21	17.195	2.296
24	ミニ	365	30	24.564	2.296
25	ピアノ	315	24	19.651	2.270
26	コンクール	520	43	35.208	2.262
27	イベント	859	100	81.879	2.240
28	メール	1455	120	98.255	2.233
29	スポーツ	1855	261	213.704	2.228
30	メールアドレス	278	18	14.738	2.228
31	ステージ	210	15	12.282	2.214
32	パン	275	20	16.376	2.195
33	クラス	585	51	41.758	2.195
34	モニター	411	47	38.483	2.188
35	メニュー	240	22	18.013	2.169
36	ホームページ	1309	166	135.919	2.163
37	ゲーム	749	47	38.483	2.146
38	パソコン	1276	123	100.711	2.113
39	テニス	762	40	32.752	2.109
40	リレー	260	15	12.282	2.109
41	ダブルス	254	13	10.644	2.092
42	チーム	4475	302	247.274	2.088
43	ジュニア	277	16	13.101	2.085
44	キャンプ	550	37	30.295	2.079
45	クリスマス	202	10	8.188	2.070
46	バス	1721	151	123.637	2.061
47	スキー	278	15	12.282	2.039
48	ペット	232	13	10.644	2.017
49	コピー	206	15	12.282	2.001
50	メッセージ	556	35	28.658	2.001

広報紙に偏在する表2の50語には、白書に偏在する50語（表1）に目立った、＜経済・産業＞＜情報＞＜保安・防災＞＜福祉＞＜外交＞＜環境＞などの分野の語は、ほとんど見られない。表2の50語の性質が見えやすいような分類枠を立てて一覧にすると、次のようになる。

- ＜活動＞ 2. チャレンジ, 15. バレーボール, 22. コンサート, 23. バスケットボール, 16. サポート, 18. リズム, 29. スポーツ, 37. ゲーム, 39. テニス, 40. リレー, 41. ダブルス, 44. キャンプ, 47. スキー, 26. コンクール, 27. イベント, 45. クリスマス
- ＜場所＞ 1. コーナー, 3. プール, 5. ホール, 6. ギャラリー, 9. センター, 11. グラウンド, 7. コース, 21. チャンネル, 31. ステージ, 14. クラブ, 33. クラス, 42. チーム
- ＜物＞ 8. チケット, 13. プレゼント, 17. パネル, 19. ペットボトル, 25. ピアノ, 32. パン, 35. メニュー, 38. パソコン, 46. バス, 48. ペット
- ＜媒体＞ 4. ページ, 10. ポスター, 20. ファクス, 28. メール, 30. メールアドレス, 36. ホームページ, 49. コピー, 50. メッセージ
- ＜資格＞ 34. モニター
- ＜抽象物＞ 12. サイズ, 24. ミニ, 43. ジュニア

生活、趣味、スポーツなど人々の日常活動に関わる外来語が、特に多く見られる。日常活動自体を表す語（＜活動＞）、その活動が営まれる場所や組織を表す語（＜場所＞）、その活動において使われる道具や物品を表す語（＜物＞）が多い。さらに、活動に関する連絡や通信の手段を表す語（＜媒体＞）も目立つ。また、活動を行う＜資格＞を意味する語もある。広報紙は、人々の日常的な活動を、それが営まれている場所や関与する物や媒体、資格とともに表現されやすいものであると考えることができる。

なお、白書に多かった＜抽象物＞に属する語は、広報紙にも少なくないが、白書に偏在する語（表1）の場合とはその内実が異なっている。白書の場合は、社会のしくみやその構成物の動きや性質を意味する語が目立ったのに対して、広報紙の場合は、物の大小や人の老少などにかかわる語が目立つ。

4.3 新聞に偏在する語彙

表3 新聞の特化係数 上位50語

順位	外来語	総頻度	新聞度数	新聞出現率	新聞特化係数
1	ソロ	455	455	8.724	3.000
2	プレーオフ	380	380	7.286	3.000
3	シード	372	372	7.132	3.000
4	アンダー	349	349	6.691	3.000
5	パー	342	342	6.557	3.000
6	ラリー	326	326	6.250	3.000
7	テレ	318	318	6.097	3.000
8	ドリーム	285	285	5.464	3.000
9	バーディー	277	277	5.311	3.000
10	シュート	256	256	4.908	3.000
11	レスリング	246	246	4.717	3.000
12	スライダー	245	245	4.697	3.000
13	ユース	218	218	4.180	3.000
14	ボギー	207	207	3.969	3.000
15	ピンチ	206	206	3.950	3.000
16	トレード	201	201	3.854	3.000
17	マニフェスト	1647	1644	31.520	2.960
18	シーン	226	225	4.314	2.904
19	フル	220	219	4.199	2.901
20	メダル	1058	1053	20.189	2.898
21	ゴロ	731	727	13.939	2.882

22	ヤード	318	316	6.059	2.865
23	デスク	289	287	5.503	2.852
24	ヒット	424	421	8.072	2.849
25	ファン	1604	1600	30.677	2.823
26	エース	667	666	12.769	2.819
27	ジャーナリスト	349	346	6.634	2.818
28	リーグ	5562	5551	106.429	2.799
29	バット	302	299	5.733	2.791
30	ストレート	535	534	10.238	2.778
31	デビュー	493	492	9.433	2.760
32	キロ	5181	5158	98.894	2.758
33	ハム	799	797	15.281	2.710
34	ラグビー	811	808	15.492	2.691
35	ランキング	298	293	5.618	2.662
36	パス	337	336	6.442	2.662
37	ドラマ	1009	1004	19.250	2.626
38	プロデューサー	499	494	9.471	2.616
39	トライ	439	435	8.340	2.610
40	スポンサー	200	196	3.758	2.604
41	クローズアップ	529	523	10.027	2.602
42	アマ	272	271	5.196	2.592
43	マウンド	261	260	4.985	2.577
44	プロ	3652	3633	69.656	2.575
45	セール	216	211	4.046	2.550
46	スター	228	227	4.352	2.525
47	センチ	1862	1853	35.528	2.524
48	コーチ	699	695	13.325	2.510
49	コンビニ	333	324	6.212	2.486
50	ライバル	313	309	5.924	2.478

新聞に偏在する外来語50語は、表3の通りである。特化係数が、最高値の3となるもの（新聞のみにしかないもの）がいくつかあるのは、新聞のデータ量が他と比べて極端に多いことによるものであろう。表3の語について、白書、広報紙の場合に準じて意味分類を行うと、次のようになる。

- ＜スポーツ＞ 1. ソロ, 2. プレーオフ, 3. シード, 4. アンダー, 5. パー, 6. ラリー, 9. バーディー, 10. シュート, 11. レスリング, 12. スライダー, 14. ボギー, 15. ピンチ, 16. トレード, 20. メダル, 21. ゴロ, 22. ヤード, 26. エース, 28. リーグ, 29. バット, 30. ストレート, 33. ハム, 34. ラグビー, 36. パス, 39. トライ, 43. マウンド, 48. コーチ
- ＜興行＞ 8. ドリーム, 13. ユース, 18. シーン, 24. ヒット, 25. ファン, 31. デビュー, 35. ランキング, 37. ドラマ, 40. スポンサー, 42. アマ, 44. プロ, 46. スター
- ＜商業＞ 45. セール, 49. コンビニ
- ＜報道＞ 7. テレ, 23. デスク, 27. ジャーナリスト, 38. プロデューサー, 42. クローズアップ
- ＜政治＞ 17. マニフェスト
- ＜抽象物＞ 19. フル, 32. キロ, 47. センチ
- ＜その他＞ 41. クローズアップ

まずもっとも明らかなこととして、＜スポーツ＞の分野の語がきわめて多いということが挙げられる。広報紙に偏在する語（表2）にも、＜活動＞に分類したものの中にスポーツの語はあったが、それらは、「バレーボール」「バスケットボール」「テニス」「スキー」、あるいは「スポーツ」など、人々が日常的に行うスポーツの名称が目立った。それに対して、新聞に偏在する語の場合は、「アンダー」「パー」「バーディ

ー」「ボギー」や「シュート」「スライダー」「ゴロ」「バット」など、ゴルフや野球などの競技内容にかかわる語が目立つと言えるだろう。また、＜興行＞＜商業＞の分野の語も多い。＜報道＞の分野の語が目立つのは、新聞の役割が直接現れたもの、＜政治＞の分野から「17. マニフェスト」1語が挙げたのは、この語が選挙の際の公約を指すことにより、報道の機能と密接にかかわることによるものと考えられる。＜抽象物＞の語は、大小や量の単位を意味する語で、白書の場合よりも広報紙の場合に近い。

以上のように、白書に偏在する外来語は、政策上重視される分野の語が多く、広報紙には、人々の日常活動にかかわる語が多い。そして、新聞には、娯楽あるいは報道媒体としての性質が反映した語が多く見られる。各媒体を特徴付ける外来語は、それぞれの媒体で述べられる内容と密接にかかわることが確認できよう。

5 定着度（理解率）との関係

次に、各語の定着度（理解率）と、各媒体における特化係数との相関について考察してみたい。定着度調査にかけた異なり398語（本報告書の第2部第1章参照）から、アルファベット略語2語を除いた396語のうち、次の19語は、今回調査対象にした2003年発行の公共媒体に出現しなかった。

インディケーター、インテグレーション、オーセンティシティ、オーソライズ、カスタマイズ、カスタムメイド、ケアワーカー、コンファレンス、シラバス、スカラーシップ、スタートアップ、トリアージ、ヒエラルキー、ビオガーデン、マイルストーン、メディカルチェック、モラルハラスメント、レシピエント、レジュメ

この19語以外の377語について、定着度調査の結果得られた、国民全体の理解率と、白書、広報紙、新聞の三つの媒体における特化係数との関係を見るために、図を作成した。

まず、国民全体の理解率を10%刻みにして、その範囲に属する外来語について、媒体ごとに特化係数の平均を算出した。例えば、理解率0～10%の範囲には61語の外来語が属するが、その61語について、媒体ごとの特化係数の平均を算出すると、白書では2.072、広報紙では0.213、新聞では0.71となる。こうして算出した数値をグラフ上にプロットし、媒体ごとに線で結んだものが図である。

図から次のようなことが分かる。まず、白書は、左から右にほぼ直線状に下がっていく線を描く。理解率の低い語は、白書の特化係数が非常に高く、理解率の高い語は、白書の特化係数がそれほど高くない。これと対照的であるのが広報紙で、左から右にほぼ直線状に上がっていく線を描く。理解率の低い語は、広報紙の特化係数は非常に低く、理解率の高い語は、広報紙の特化係数が高くなる。そして、理解率が80%を超えるところに大きな落差があり、白書と広報紙の特化係数平均の高低が、ここで逆転している。

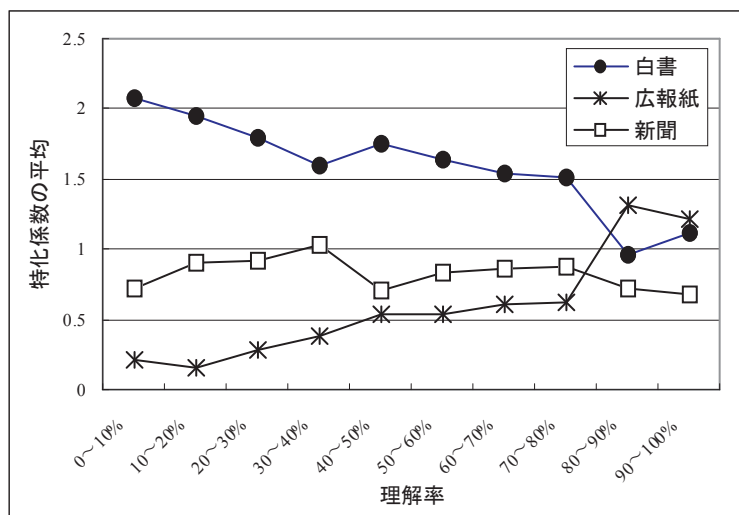


図 理解率と特化係数

一方、新聞は、ほぼ平坦な線を描き、理解率の高低と特化係数の高低との間に、相関が見られない。新聞には、定着度の低いものから定着度の高いものまで、様々な段階の外来語が用いられていることを示すものであろう。

6 おわりに

以上、本論文では、白書、広報紙、新聞の三つの媒体の外来語の特徴を、特化係数という指標によって把握し、その性質を意味分野と定着度（理解率）の観点から考察した。その結果明らかになったことは、次の二点である。

○それぞれの媒体を特徴付ける外来語の意味分野を考察すると、媒体に書かれている内容をよく反映している。

○それぞれの媒体を特徴付ける外来語の定着度は、白書では低く、広報紙では高い。新聞は、定着度との相関を示さない。

媒体別の外来語の特徴をとらえるための着眼点は、本論文の採った偏在する語彙ということ以外にも、考えられよう。また、偏在する語彙の考察の範囲を、白書、広報紙、新聞以外の媒体についても拡大し、公共的な媒体とそれ以外の媒体との違いを明らかにしていくことも必要である。

注

- 1 同趣旨のことは、国立国語研究所「外来語」委員会（2006）においても指摘した。
- 2 「外来語」言い換え提案のためのデータ整備は、2005年発行分の資料までを対象として行ったが、本論文では、2003年分のみを対象として扱う。
- 3 毎日新聞社「CD-毎日新聞」（日外アソシエーツ）による。

参考文献

- 国立国語研究所「外来語」委員会（2006）『分かりやすく伝える 外来語言い換え手引き』ぎょうせい
田中牧郎（2006）「現代社会における外来語の実態」『新「ことば」シリーズ19 外来語と現代社会』国立印刷局